

経済学部 2025 年度 国際フィールドワーク（オランダ）
報 告

2025 年度の国際フィールドワークの場として本学部が用意したのがオランダ・ベルギー・シンガポールである。本科目では下記 4 つを活動軸として展開、2025 年 9 月 2 日（火）～9 月 13 日（土）にかけて海外活動を展開した。

- ① 海外現地との交流を通じて国際的視野を磨き、自分の世界観を広げる
- ② 経済・産業関連施設を視察・調査し、経済のグローバル化の理解を深める
- ③ 現地の文化と接することにより、多様な価値観を尊重するマインドを育てる
- ④ 英語力のレベルアップとコミュニケーション力をつける

1. 概要

写真：ライデン中央駅にて



出所）教員撮影。

本科目は経済学部 佐土井が主担当、太田が現地引率教員として展開した。4～7 月の講義期間においては、オランダの歴史、経済を概観するといった座学と受講学生によるオランダでの英語プレゼンテーションの作成、練習などの期間を経てフィールドワーク活動に臨

んだ。

今回が初めての海外という学生も多く、ほとんどの学生が慣れない入国審査や現地交通機関利用にも戸惑いをみせていたが、日に日に現地に溶け込み、滞在先でも自分たちの視点で風景を眺める、産業のあり方を考える、そして現地の暮らしを垣間見るといったことに慣れていく姿が印象的だった。加えて経験を重ねるごとに英語「耳」を強化していく様子は、引率する我々からも頼もしく感じた次第である。

以下、行程のうち、大学訪問や現地企業訪問時の様子を紹介したい。

2. ライデン大学 Universiteit Leiden における学生間交流

ライデン大学はオランダ最古の大学であり、シーボルトが日本からの帰国後、同大学で日本について教鞭をとったことから、世界で初めて日本学科が設けられたとされる大学である。昨年度に引き続き、今年度も同学科の学生たちと交流した。

左表：学部生らによるプレゼンテーションタイトル

右写真：ライデン大学内でのプレゼンテーションの様子

1. Japanese Over tourism
2. Differences in Bicycle Usage Rates -Current situation of Japan-
3. Sleeping hours and working time
4. Education to design happiness
5. Too Thin, Too Risky -The Growing Health Risks Among Japanese Women-

出所) 左表：学生作成資料より引用。

右写真：教員撮影。



ここでは、ライデン大学の学生たちが学外ツアーを用意してくれた。ライデンは鍵の街として知られており、歴史的な建造物にもその紋章が残されている。その説明を英語で受けながら街の美しさを堪能した。その後、FW 受講者らによるプレゼンテーションを展開。事前にオランダの歴史や生活のあり方を学び、そこから同年齢のライデン大学生に興味をもってもらおうと工夫を凝らしたプレゼンテーションを、学生たちは時間をかけて作成してきた。結果、ライデン大学の学生たちも真剣にプレゼンテーションに向き合い、聴き入っていた様子がみられたことは、引率教員としても誇らしく思った次第である。プレゼンテーショ

ンに対する質問も多く受け、そこに悪戦苦闘しながらも自分たちの言葉（英語）で回答したことも学生たちの思い出に残った様子でもあった。

加えてライデン大学側も、自分たちの大学での学びの様子をプレゼン資料に作成しており、一般的な日本の大学生の勉学への向き合い方との違いを痛感した本学学生たちの姿もみられた。

互いのプレゼンテーションの後には、皆でライデン地方の伝統的なパンケーキをディナーに、互いに英語と日本語を交えた交流の場を持てたことも楽しい思い出だろう。

写真：ライデン大学の学生たちとパンケーキ Dinner



出所）教員撮影。

2. Vanderlande 社訪問

同社は 1949 年設立のオランダ企業である。小売業、小包・郵便事業向け物流システムに強みがあり、空港の旅客手荷物処理システムにおいては世界トップシェアを誇る。2017 年には株式会社豊田自動織機に買収されているが、日本人出向者は数名しかおらずオランダ人によるマネジメントが主となっている。今次の訪問では、Vanderlande 研究開発部門の方（オランダ人）と日本からの出向者の方で対応頂き、特に日本からの出向者の方へのインタビューではオランダと日本の労務管理の違いやオランダ人の「職」に対する考え方などを教示頂いたことも興味深かった。

加えて、訪問時は研究開発センターを視察させて頂いた。自分たちが日頃何気なく利用している E-Commerce の裏側にこのような産業機械の存在があることを学生たちも身を乗り出して見入っていた。

写真：Vanderland 社 R&D センター視察の様子



出所）教員撮影。

3. アムステルダム自由大学 Vrije Universiteit Amsterdam ワークショップ

写真 チューリップの折り方を教えながらの団らん（出所）教員撮影。



アムステルダム自由大学では、大学院講義を受講後、学部生らとのワークショップに臨んだ。ワークショップでは日蘭互いの文化交流の視点から、アニメーションをベースにしたクイズ形式で場が盛り上がった。FW 受講生、そして蘭学生が混じったチームで分かれ、クイズの答えを楽しみながら探っていた。

ワークショップ前後では、規模の大きなカフェテリアで様々な国のメニューに見入り、大学の Start-ups 紹介では日本人学生の視点から企業戦略を考える場も頂けた。蘭学生とともに、美味しいピザと日本からの土産（駄菓子）をミックスしながらワイガヤできたこ

とも、FW ならではの楽しみだったといえよう。

同大学は留学生も多く、受講生のなかには「講義を英語で実施することで言語の壁によって学びが邪魔されていない状況や、アニメによる互いの文化や興味を「繋ぐ」力を実感した」

(経済学科3年次)とコメントを残した学生がいたことも印象的である。

以上、概要報告である。ほかにも現地の方を宿泊先にお招きして皆でBBQを楽しんだり、実際に稼働している風車(小麦粉挽き)を見学し、風車の仕組みを教えてもらったりその小麦からつくってもらうパンケーキを堪能したりと、受講者らは十分に国際FWを満したと思う。当初は、語学の壁や長期にわたる大人数での行動、慣れない環境下での生活など一歩踏み出すまでを躊躇した学生もいたことだろう。そのなかで、受講者たちが大きな満足感を得たこと自体が本講義の大きな成果である。今年度の受講者は3,4年次の学生たちで、これから迎える就職活動、そして残り少ない大学生活と今後の過ごし方は様々である。残りの学生生活のなかで、これからの科目受講に際する姿勢や語学力の向上、資格試験への挑戦など色々な思いを彼らは抱いているだろう。それらに国際FWで得た体験を反映できれば教員としても嬉しく思う。

最後に、帰国後に受講者が提出したレポートから国際FW受講後の想いを紹介しよう。「オランダ研修によって新しい知識や価値観を知ることができ、さらに将来のビジョンの候補が増えた」(経済学科4年次)、「実際にオランダへ行って様々なイベントを経験する中で、実際に目で見て話を聞いてその場の空気を感じたことは、教室にいたときからは考えられないほど大きな情報をもたらし、何にも代え難い経験となった。」(産業社会学科4年次)。彼らの声が代弁するように、FW活動で得た想いは財産だ。彼らの想いを参考に、今後も経済学部生が積極的に国際FWを受講できる環境を我々教員も整えていきたい。

(担当：佐土井有里 太田志乃(文責))